愛して
二人のわたし
ほしい
松崎詩織・作
待宮なつ・絵

愛してほしい

ふ　し

二人のわたし

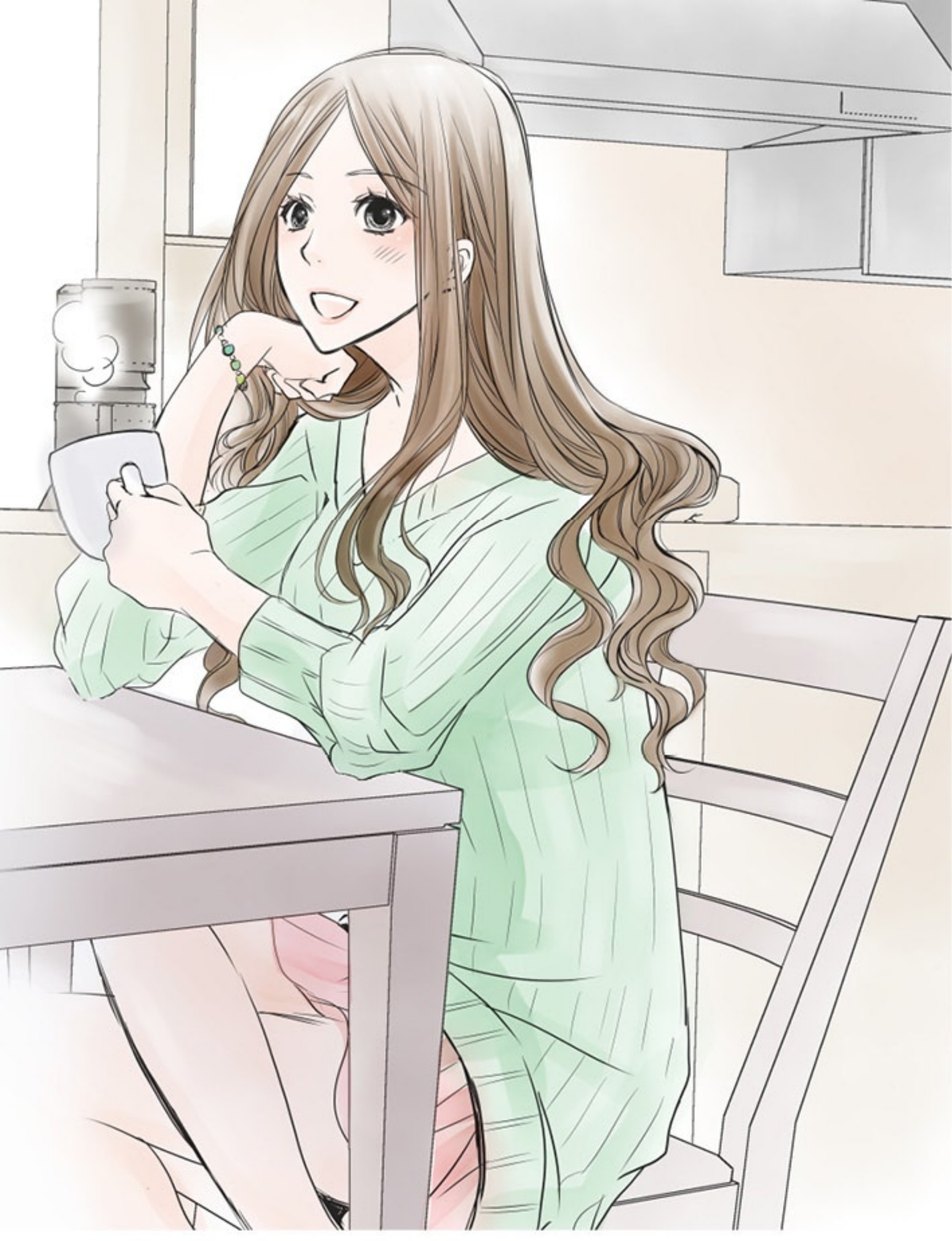
「おはよっ、香苗(かなえ)」

ダイニングのドアを開けた途端(とたん)、姉の潑剌(はつらつ)とした明るい声が響いた。一瞬、わたしはたじろいでしまう。

「お、おはよう、お姉ちゃん」

いつも昼近くまで寝ている姉が、珍(めずら)しく早起きをしているものだから、焦(あせ)ってしまった。

しかも、ちゃんと着替え、メイクも終えている。

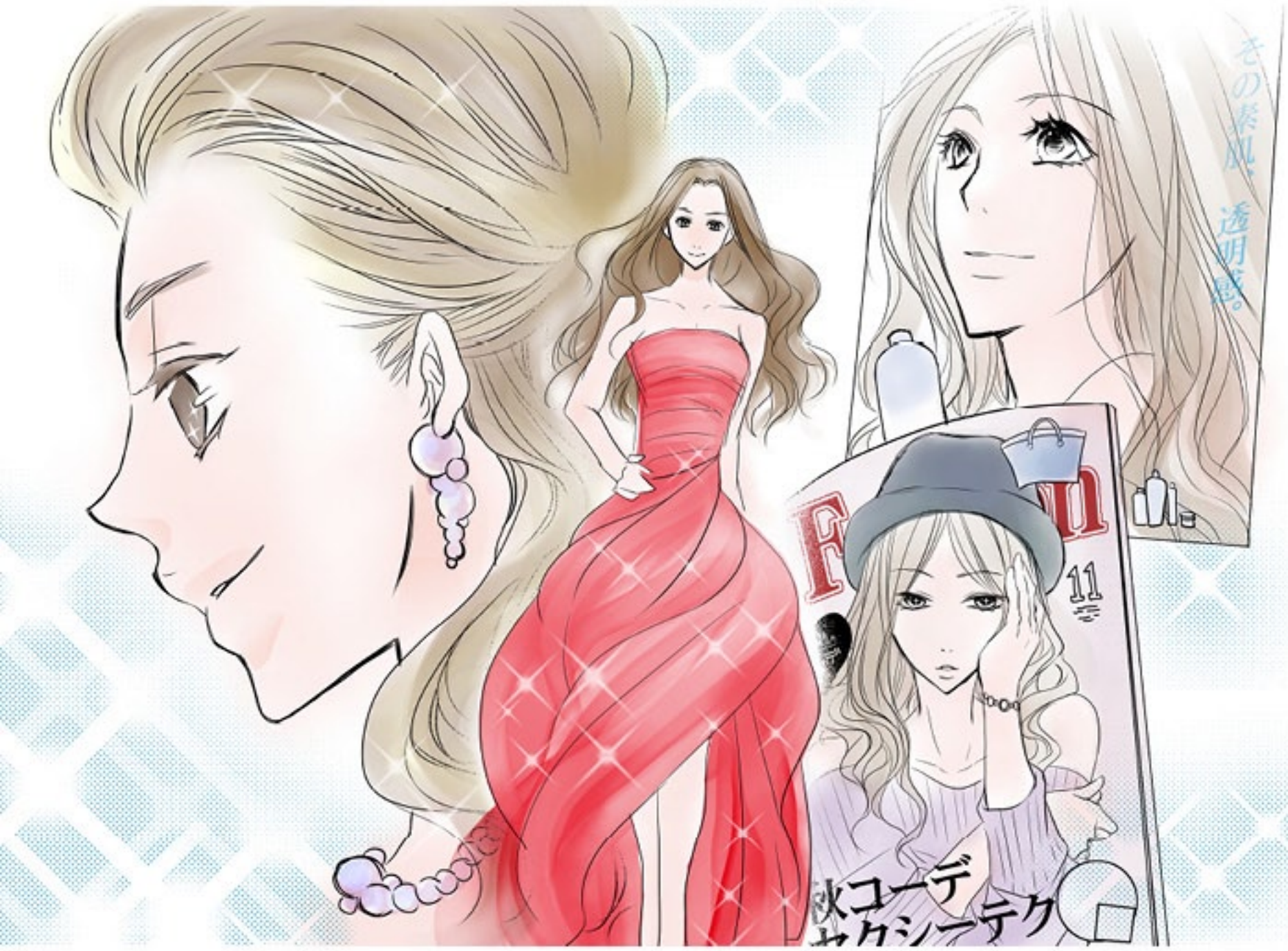


佐倉華怜、二十二歳。
わたしの双子の姉だ。
わたしと同じ大学の四年生だけど、就職活動はしていない。
姉はすでに立派な仕事を持っている。

姉はファッションモデル。

有名ファッション雑誌と専属契約を結び、人気モデルとして誌面を飾(かざ)っている。

季節も流行も先取りした華やかなファッションに身を包み、麗(うるわ)しく微笑(ほほえ)む美しい姿は、妹のわたしが見てもうっとりする。


きの奏風。透明感。
11
秋コーデ

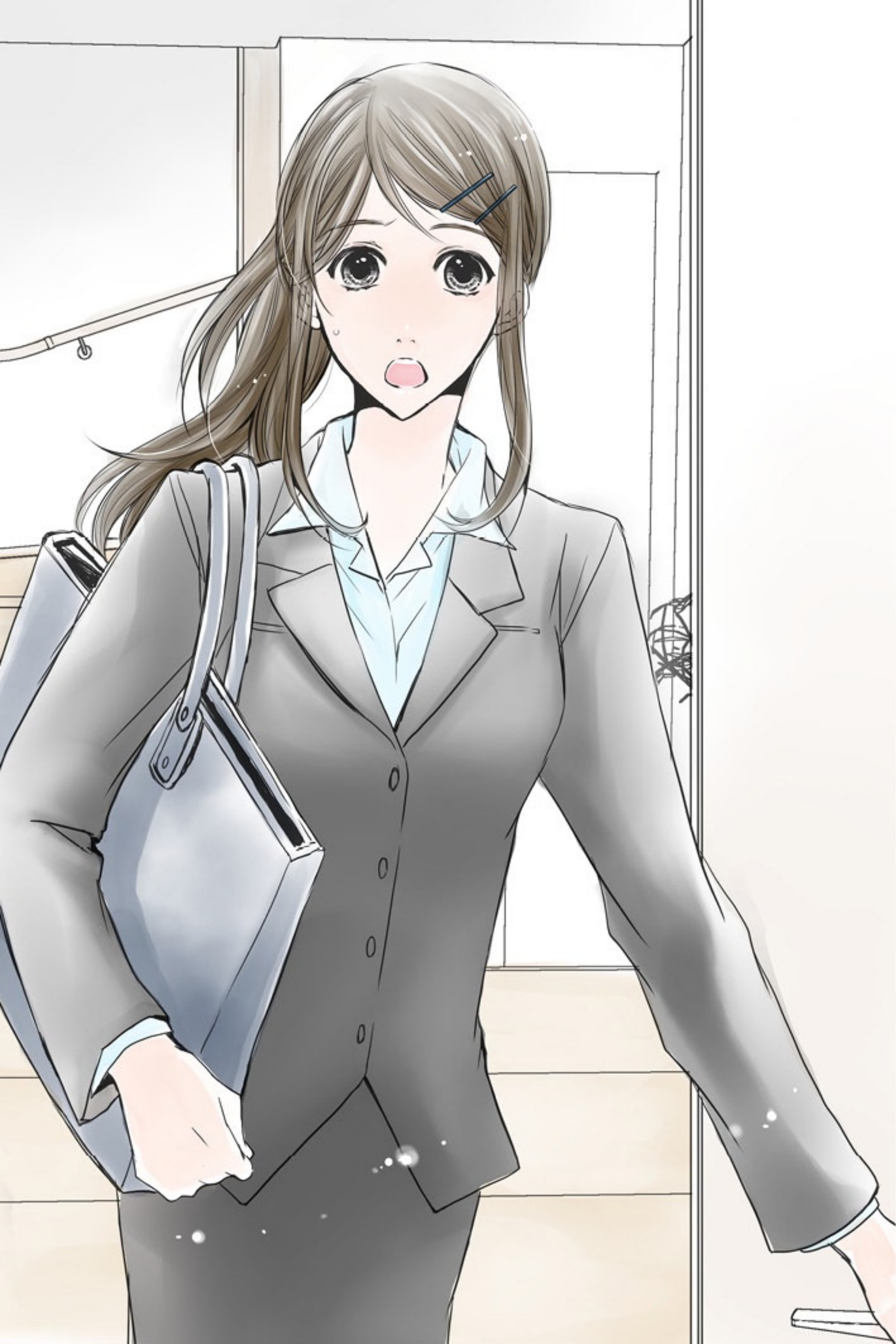
去年からは、女優としてもテレビドラマや映画に出るようになっていた。

姉妹と言っても双子なのだから、普通なら立場は対等なのだろう。

でも、姉はいつだってわたしを年下のように扱ったし、わたしも気後れしていた。

わたしはいつだって、姉と比べられてきた。
仕方がないと思う。
それが双子というものだ。
姉に対する憧れ、羨望、そして嫉妬。
どんなに近くにいても、姉はわたしにとって、いつも遠い存在だった。

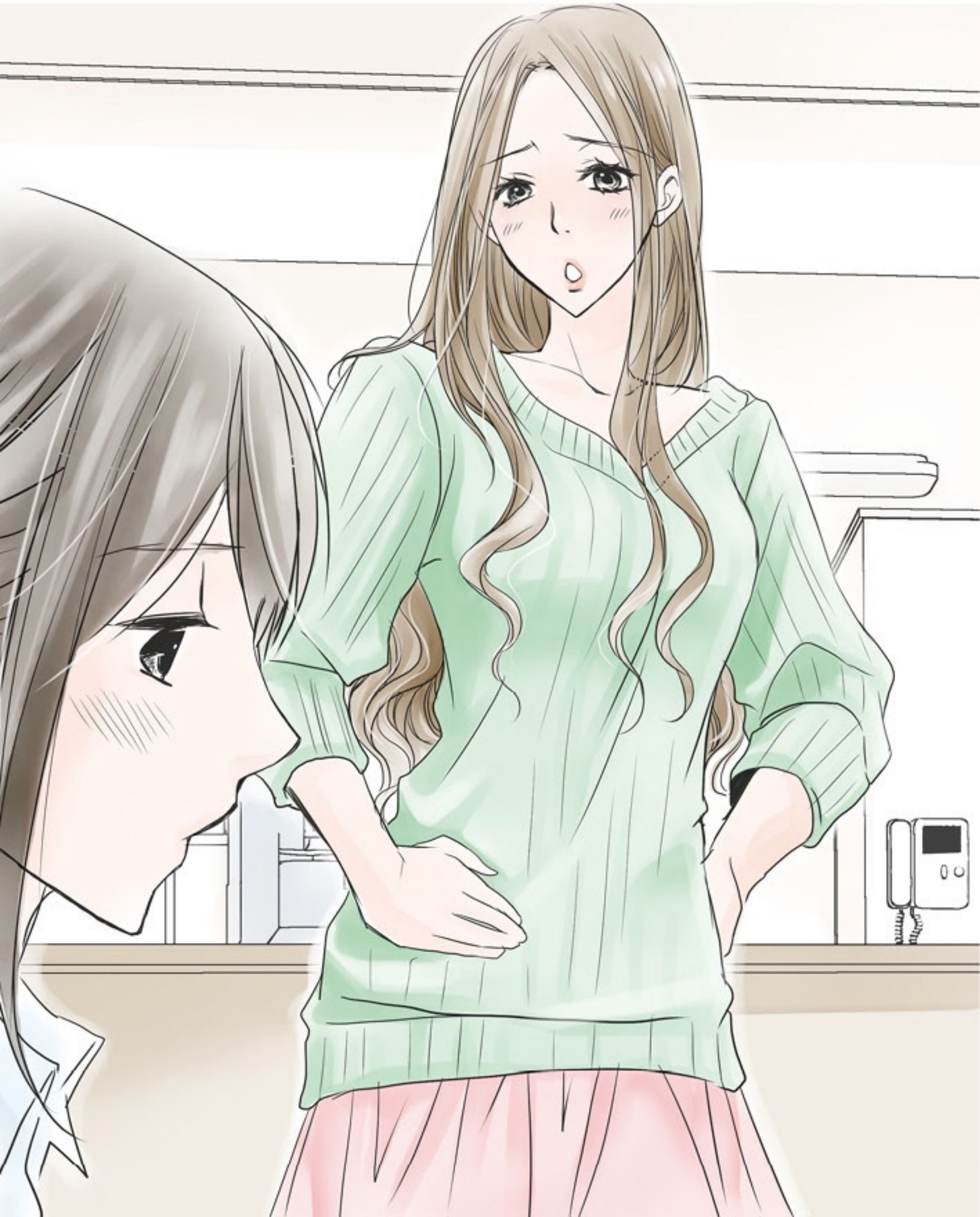
「香苗、いくら就活だからって、
その痛いセンス、もうちょっと
なんとかならないの？
それじゃまるで、囚人服よ」



姉の蔑(さげす)んだ視線を掻(か)いくぐるように、テーブルについた。

「でも、就活ってこういうもんだから……」

「あなたねぇ、そんなこと言ってるから、八十社も受けて、一つも内定もらえないのよ」



姉とわたしは一卵性双生児で、顔も背格好(せかっこう)も声も、子どものころから良く似ていた。

中学生までは、先生や友達に間違われてばかりだった。

今でも風呂上(ふろあが)りにノーメイクで髪を結っていたりすると、両親でも間違うことがあるほどだ。

それほどそっくりだというのに、両親からもクラスメイトたちからも、愛されたのはいつも華怜のほうだった。

明るくて元気で、周囲を巻き込んでいく性格の華怜。

大人しく控(ひか)えめで、何事にも消極的なわたし。

そんな性格が、髪型や服装やメイクにも表れるから、

まったく同じ顔に同じ声だというのに、高校生のころからは、わたしたちを間違える人はいなくなった。

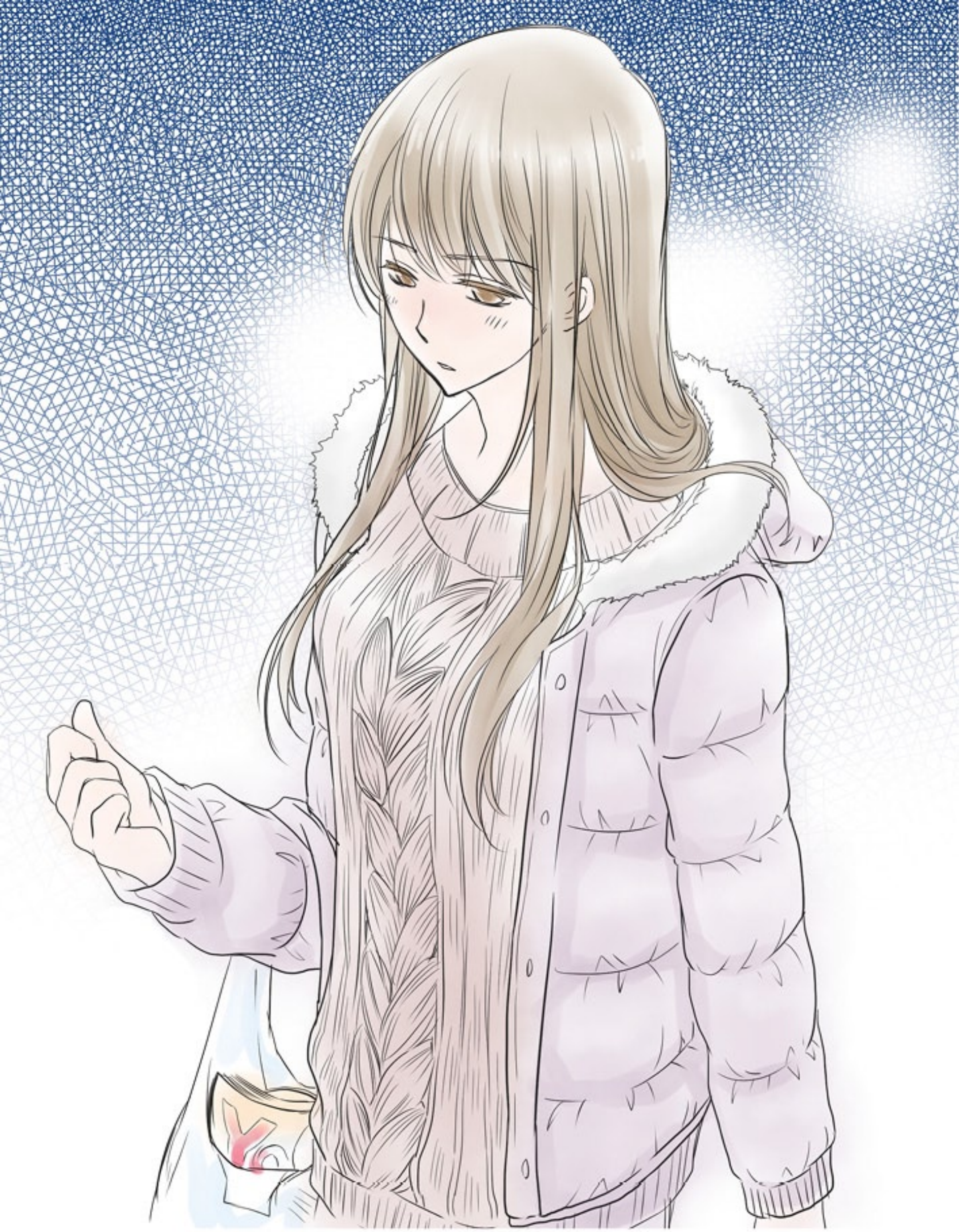
〈慎重に検討を重ねた結果、残念ながら今回は採用を見送らせて――〉

「また、お祈りメールか……」

就活学生がそう呼ぶ、不採用通知がまた来てしまった。

深いため息を吐く。
辛(つら)すぎて、もう涙も出ない。

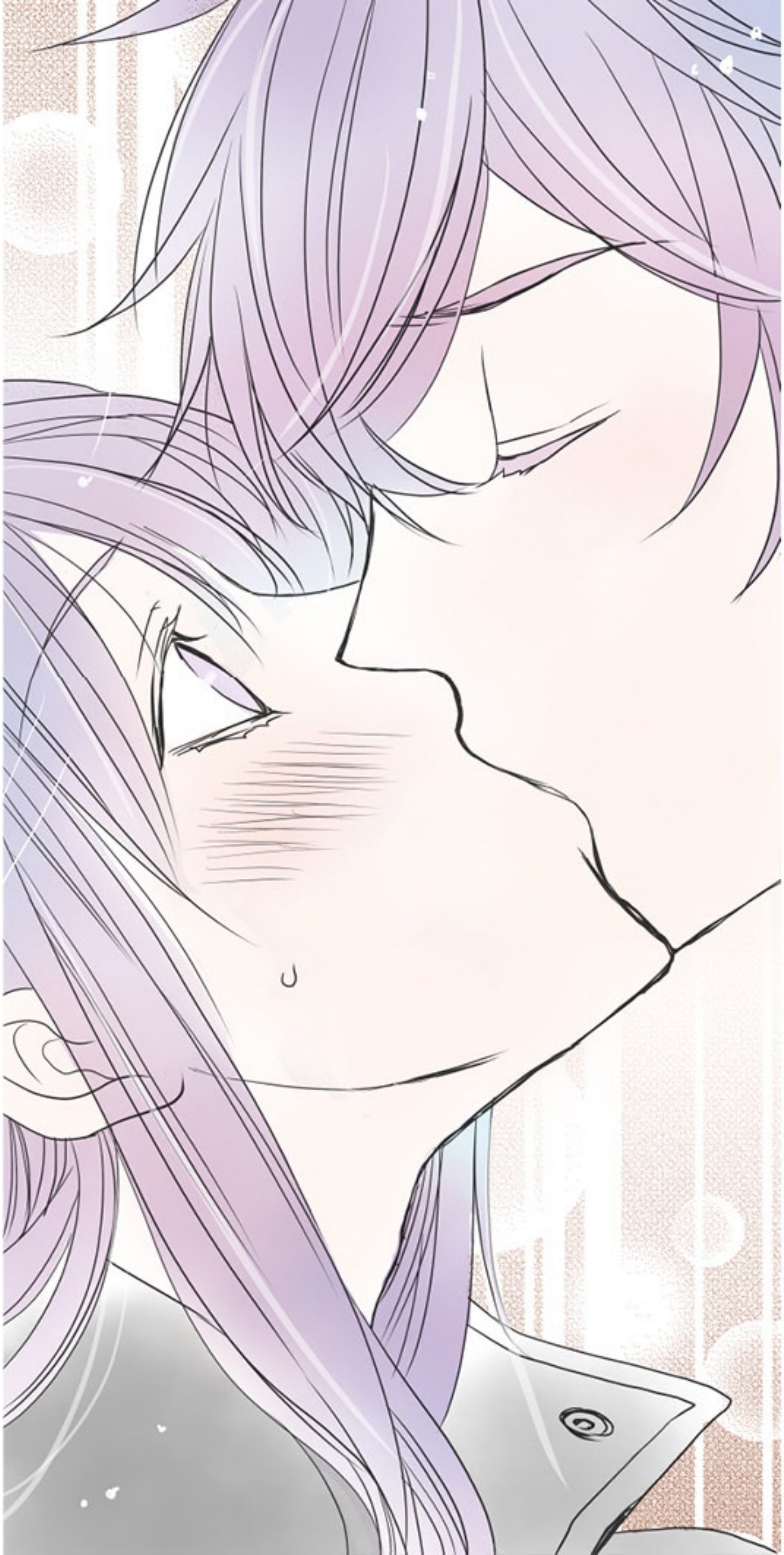
誰もわたしのことなんて
必要としてないんだ。



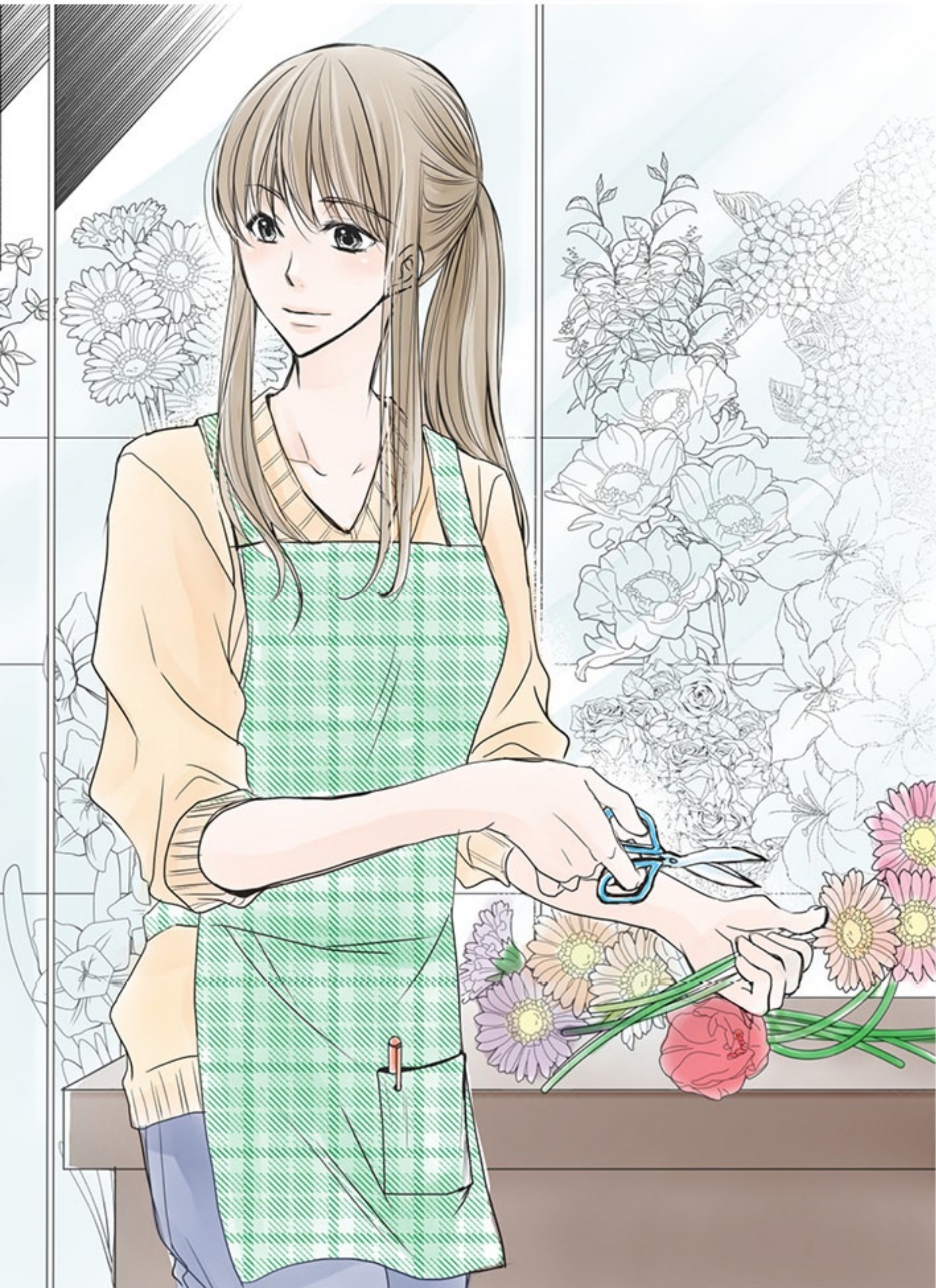
この時はまだ、まさかわたしが、
華やかな姉の人生を生きること
になるとは、夢にも思っていな
かった。

姉に想いを寄せているとばかり
思っていた、
高校の同級生、亮二との再会。

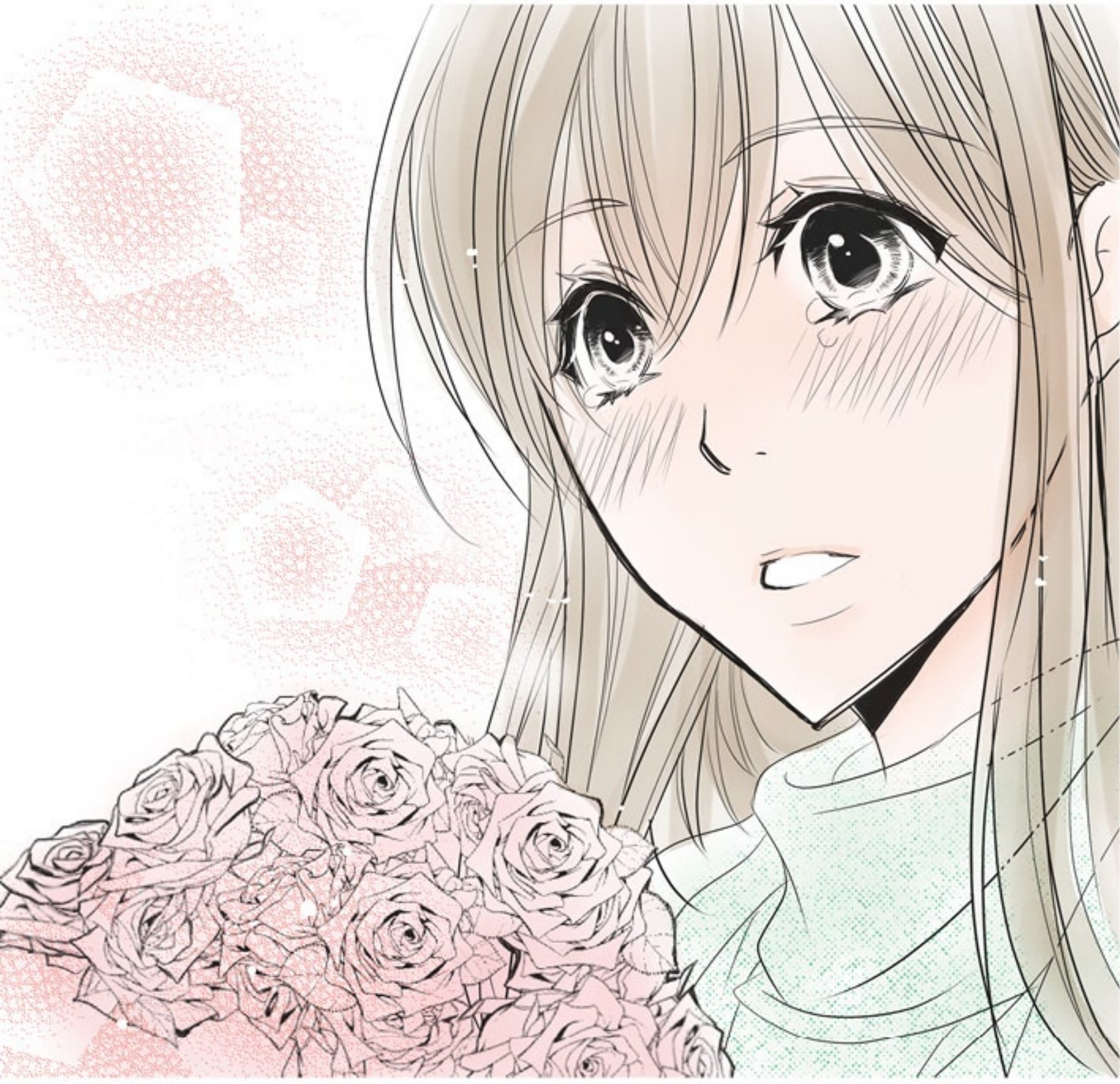
「香苗に、逢いたかった」



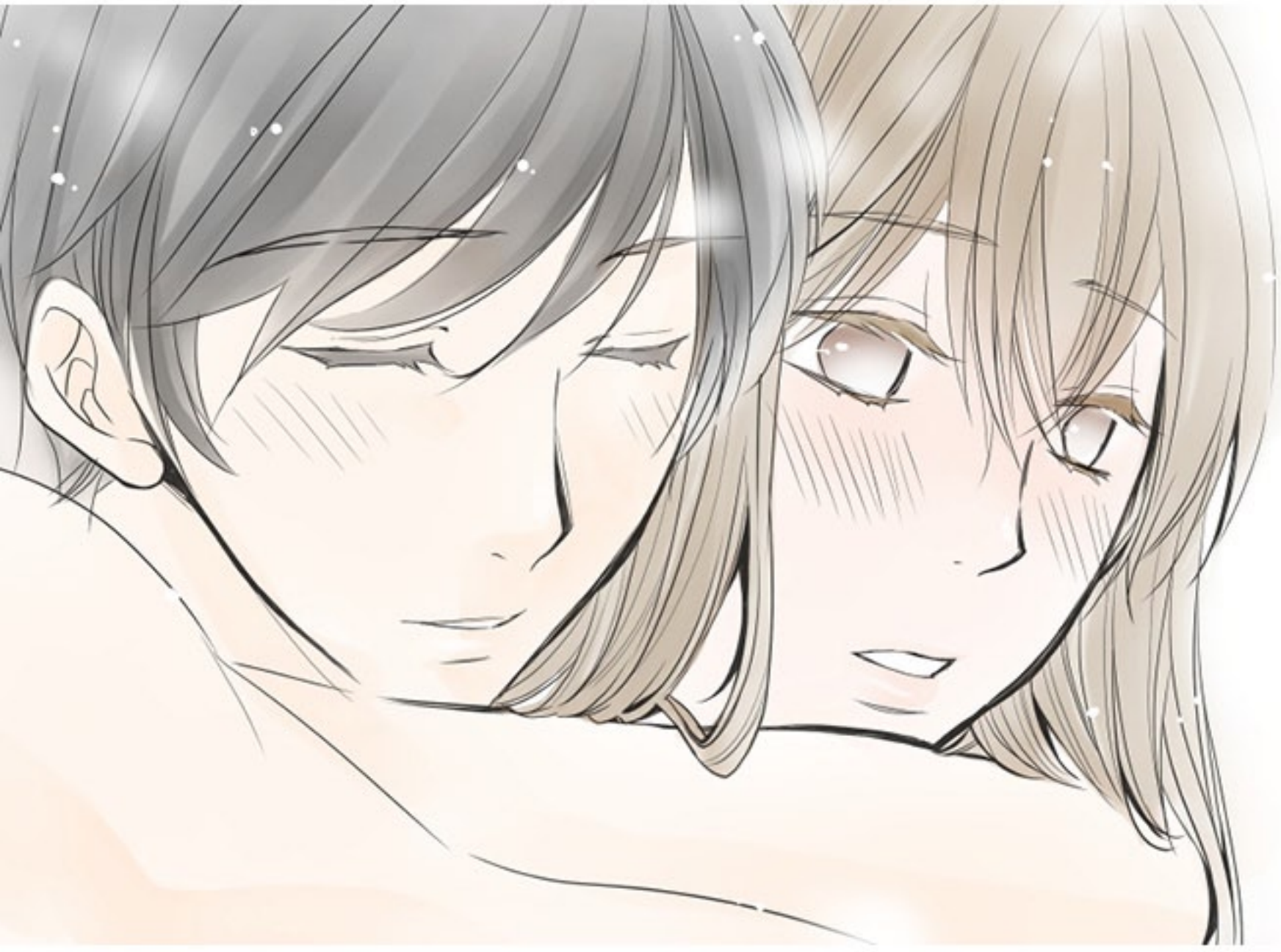
亮二のバンド活動を支えるため、
花屋でアルバイトを始めた香苗。

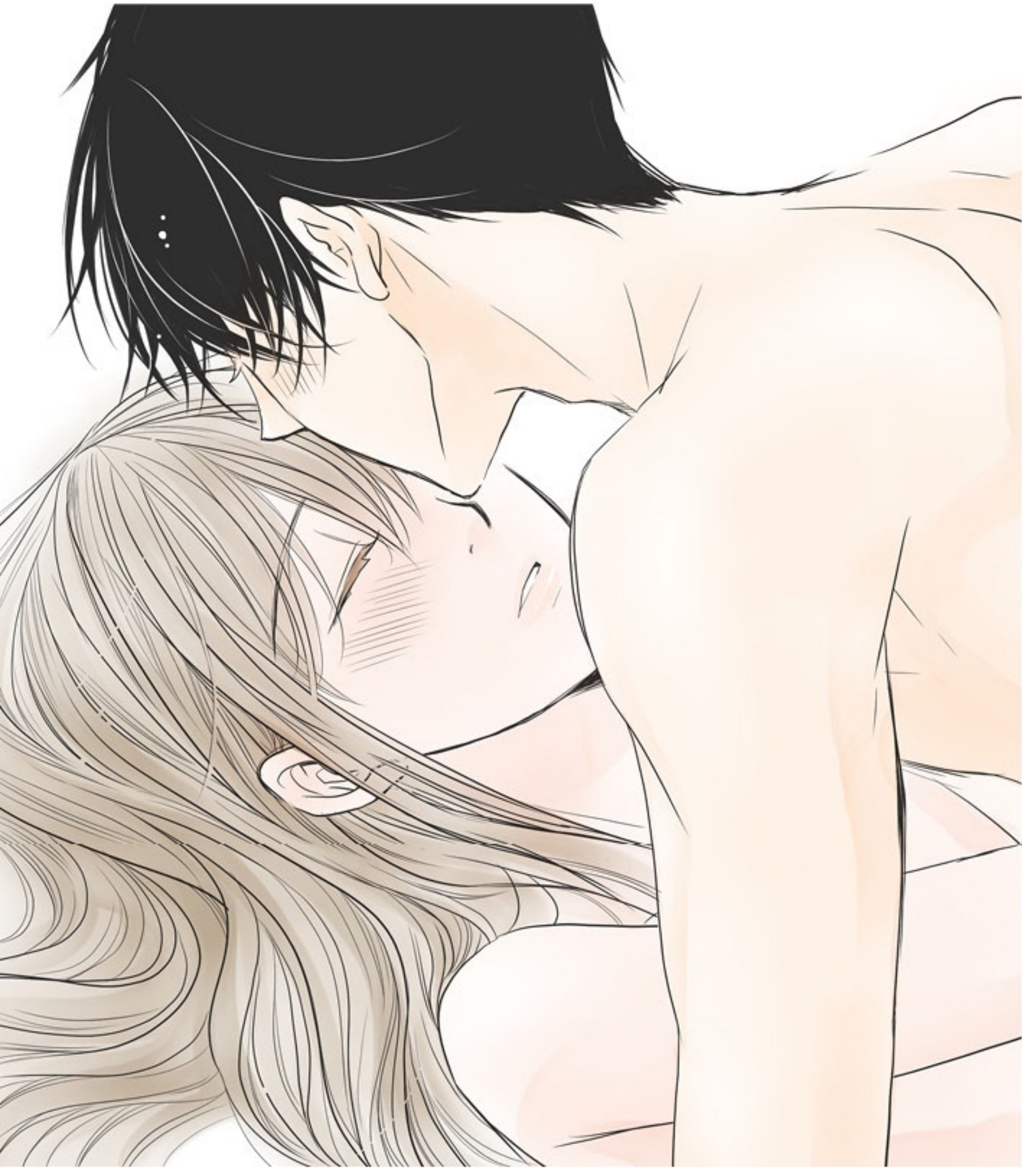


そこで出会った、
影のある美しい青年、
加藤陸（かとうりく）。



急激に近づいていく
二人の距離。

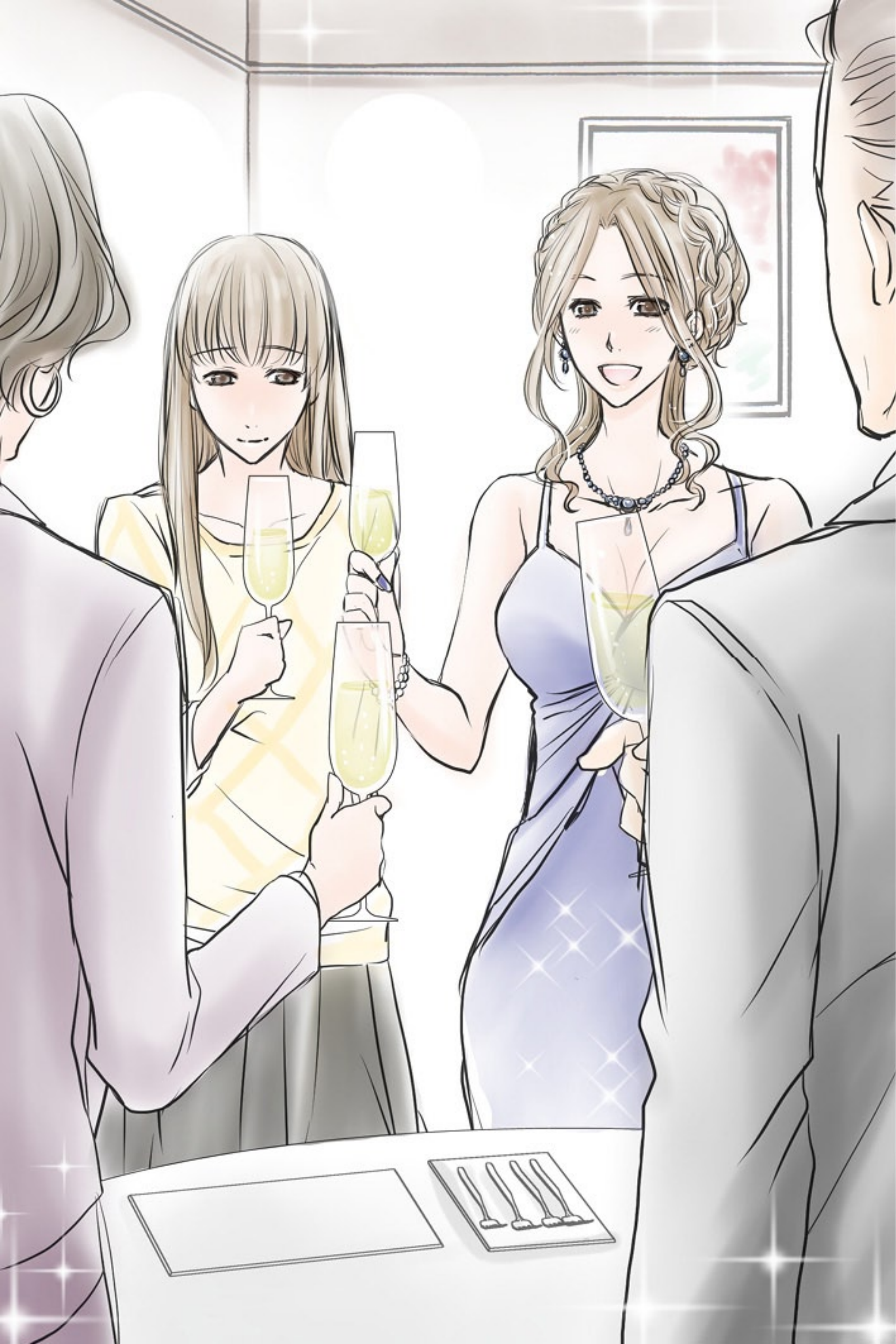




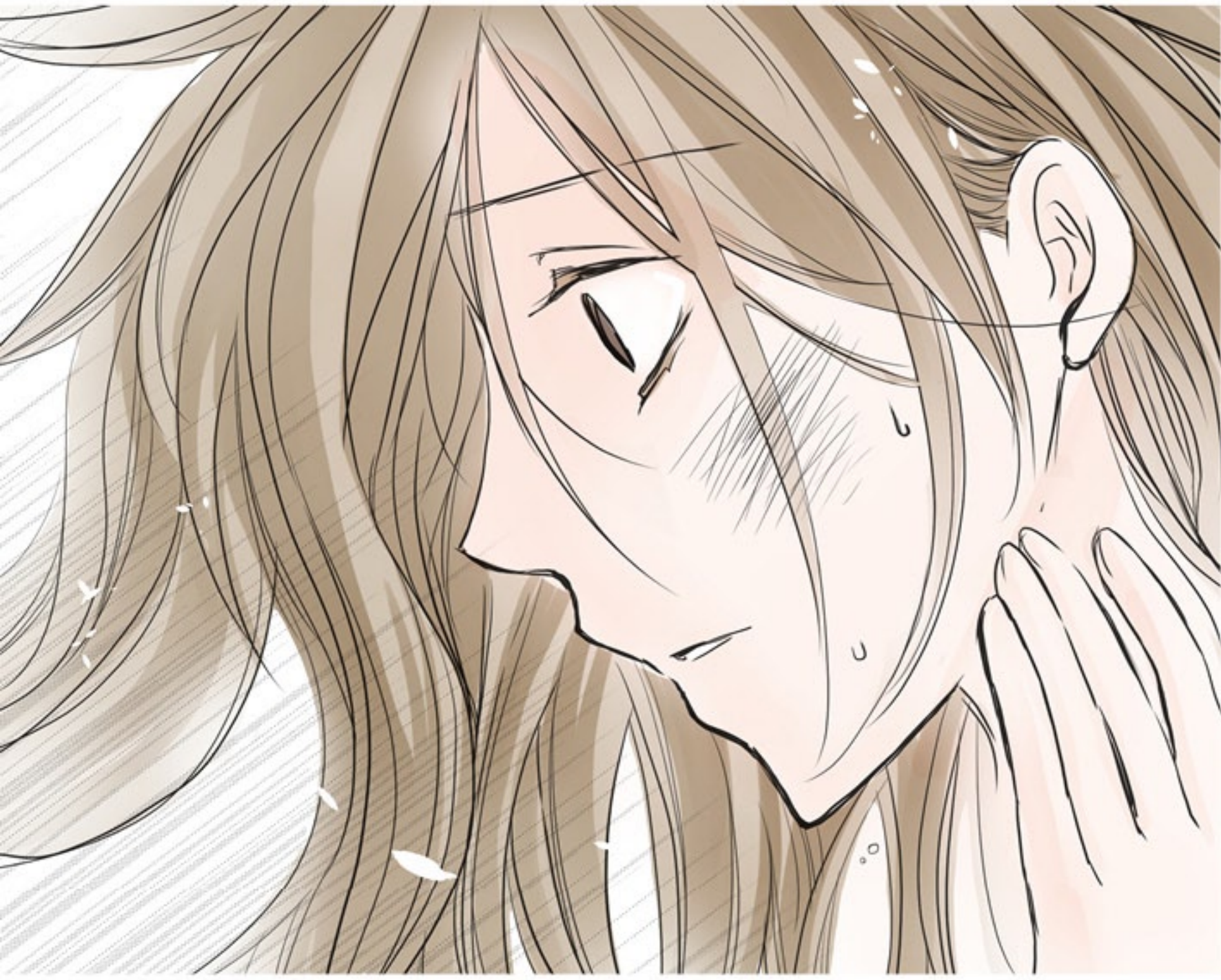
だが、陸もまた、
忘れることのできない
深い心の傷をかかえていた……

そして……

双子の姉と両親を巻き込んだ
大事故によって……



香苗の運命は、急激に動き出し、
思いもよらぬ人生を生きること
になる……



『愛してほしい～二人のわたし』

松崎詩織／作
待宮なつ／絵

©2015　松崎詩織 / 待宮なつ
©parsola inc.